

4年間で経験したこと

○宮河麗奈、情家俊和、長生健太、松徳美穂、梅崎斗志輝、三好史彦、平野尚
市立宇和島病院

【緒言】

私が新人の頃、撮影するだけで精いっぱいになり撮影した画像をしっかりと観察できず、苦労した経験が多かった。

今回、私が入職してから4年間で経験した撮影時の失敗や工夫、学んだ事など事例をいれて報告する。

【事例1】

尿管結石経過観察中の70歳女性でKUBを撮影したが、腹部に下着のゴムの線がはっきり写っている(図1)。このゴムの線があると尿管結石と重なり、観察が難しくなる。ゴムの締め付けを目立たせないよう工夫し、撮影したものが図2である。

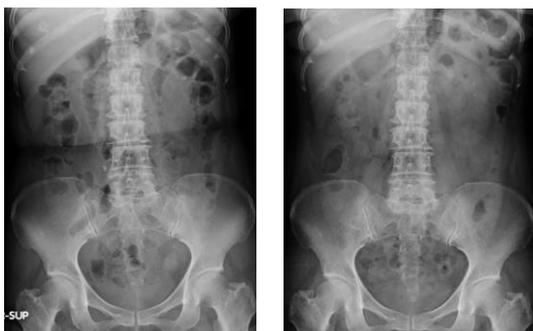


図1.締め付けあり 図2.締め付けなし

下着のゴムを一折し、腸骨稜にずらすことで腹部の脂肪に食い込まないようにした(図3)。



図3

画像上、下着のゴムの締め付けがなくなるわけではないが目立たないようにした。しかし、患者全員に下着を下げて撮影しているわけではない。患者のプライバシーを考慮し、撮影を行っている。

【事例2】

受診する数週間前に転倒し、右臀部痛と腰痛がある70歳女性で腰椎2方向撮影した(図4)。腰椎の変形は強いが骨傷は見られない。腰椎撮影後、股関節2方向が追加になった。



図4

撮影すると右股関節頸部に骨折を認めた。

初めの右臀部痛の訴えを聞いた時に股関節を意識する必要があった。加えて当院では腰椎正面のルーチンは股関節を含めた立位PA撮影を行っている(図5)。



図5.当院で行っている腰椎正面撮影

【事例3】

過去に転落外傷で救急搬送された62歳男性で肋骨骨折や左鎖骨骨折、左血気胸があった。今回は退院後、左鎖骨骨折経過観察のため撮影した(図6)。



図6

鎖骨撮影時、肺に違和感があったため上司に相談したところ気胸を疑い、主治医に連絡した。その後CTを撮影したところ気胸が再発していた。

鎖骨撮影時に画像をしっかり観察し、気胸に気づいたため早く処置につなぐことができた事例であった。

【事例4】

この事例は私ではなく先輩技師が撮影したものである。患者はコロナ陽性の87歳男性でSpO₂低下したため救急搬送された。コロナ陽性と聞いていたため、肺に注目す

るがスカウトを撮影した際、金属の異物に気が付いた(図7)



図7.スカウト画像

本スキャンはスカウト画像より上の範囲から撮影したことで、SpO₂低下の原因は入れ歯によるものとわかった(図8)。

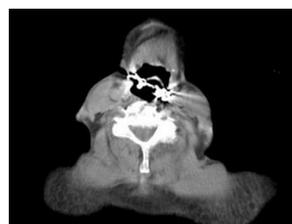


図8

【結語】

当たり前のことではあるがオーダーの意味を理解し、広い視野を持って画像に注意すべきである。そして実際に経験した事例を通して反省したことや撮影に気を付け、放射線技師として画像の質の向上と自己研鑽に取り組む。

【参考文献】

- 1)田島智徳：Hip-Spine Syndrome 変形性股関節症患者における股関節と腰椎の可動域の関係
- 2)整形外科疾患の病態やリハビリテーションに関する理解を深める